

# 差別化という模倣：明治期洋行エリートの身体の “西洋化”と人種的境界

眞嶋 亜有 MAJIMA Ayu

日本学術振興会 PD 特別研究員／国際日本文化研究センター外来研究員

## はじめに：身体文化における差別化の諸相

人は多かれ少なかれ他者との差別化を無視できない、むしろ好む傾向を持つ社会的動物である。此の世に生を受けて以来、他者との比較を通じて、目に見えて見えない個性と自己存在の意味を探り続けてきたから、差別化は、過去の習慣が身体化された価値判断のひとつとなっている。家柄、学歴、所得、生活環境といった、所与の運命や産物から、本来他者とは無関係のはずの個人的趣味嗜好に至るまで、何処かしら、他者との差別化が、自己確認や自己顕示という形で働いていることは否めない。そして差別化の最たる機能を果たす媒体は、私達が生きる以上、決して離れ逃れることの出来ない身体ではなからうか。

身体文化における差別化という自己確認と顕示欲は、西洋でも仏革命以降、消費社会の到来も後押しし、社会的上昇を求める新中間層の文化的模倣に顕著にあらわれた。当時、船と鉄道とモータリゼーションによる世界観光ブームを商機に、タイヤ会社ミシュランが、レストランを三ツ星で格付けするという画期的情報提示をした「ミシュランガイド」を刊行したように、新興ブルジョワジーにとって、王侯貴族の如き贅沢な空間で食すことの出来るレストランは、彼らが目指す上流文化への模倣に適した格好の場所であり、ミシュランの格付けガイドは、その土地のアウトサイダー達の自己顕示と社会的文化的上昇を図る有益な情報となった。

ミシュランの格付けは、消費社会とグローバル化する社会の台頭に生じた、人々の差別化と自己顕示をめぐる欲望充足の表れであったが、趣味嗜好を模倣することで自己顕示と社会的文化的上昇を図ろうとする傾向は、同時期の米国有閑階級においても見られ、衣食住のみならずレジャー、スポーツに至るまで、身体を構成する様々な文化的要素が、他者との差別化と自己確認を図る手段となった。

一方で、近代日本の身体文化を考えた際、顕著な差別化の機能を果たしていたのは、洋装であり、髭だったのではなからうか。とりわけ明治期日本エリート層は、国家的自尊心を体現したかのように、西洋文化の模倣に熱心に努めた人々であり、特に衣食住といった身体を巡る「西洋化」には、エリートであることの自己顕示と差別化の象徴として、最も情熱を注いだ人々でもあった。洋装と髭は、身体風俗の中で最もたやすく「西洋化」しやすい身体部位でもあり、「文明化」された身体表現となった。

然し、エリート層に洋行が増え始める明治中期頃から、次第に身体の「西洋化」における限界が見え始めてくる。当時大半が和装であった国内においては、洋装や髭といった身

体の「西洋化」は、エリートの象徴として十分な文化的機能を果し、彼らが規範とした西洋に最も近い身体を獲得したかの如き感覚を持つことが出来たであろう。然しそれは、様々な外国人との遭遇に満ちた洋行先では機能しなくなる。

というのも、米国をはじめとする洋行先には、既に数十年前から移住していた中国人や現地のネイティブインディアンの多くが洋装をしていた。日本国内における洋装は「文明化」の象徴であり西洋への「同化」であったが、“本場”の西洋世界においては、西洋への「同化」というより、むしろ洋装した「有色人種」への「同化」に過ぎない現実に、洋行エリートは直面させられたのである。<sup>1</sup>

同時に、洋装に次ぐ西洋文化の身体的模倣としてエリート達が勇んで生やした髭も、洋行先では、既に社会的上層で流行が衰退していた現実を目の当たりにする。自身が努力して出来る洋装や髭といった身体的模倣の限界に直面したのが、洋行経験だった。

加えて、同時期に黄禍論や排日問題といった人種の問題が西洋世界に浮上したことも、日本人エリート層の身体における「西洋化」の決定的限界を示すこととなった。西洋と自国を分かち人種という宿命的壁は、模倣可能な「文明」でも乗り越えることは出来ない。それは、日本人が「イエロー」である限り、「一等国民」としてどんなに身体文化を模倣しても、西洋からの承認を得ることは不可能なことを意味する。<sup>2</sup> 人種という自分の力では如何ともし難くも離れることの出来ない身体部位で、西洋という最も重要な他者から否定的反応を受けることは、洋行エリート達に行き場なき心情的を抱かせたに違いない。

1956年にフルブライト留学生としてプリンストン大学に留学した現・国際通貨研究所理事長の行天豊雄氏（1931年—）は、3週間の一等船客での船旅でシアトルに到着後、立ち寄ったカフェでの出来事を次の通り書き残している。

「（シアトルのカフェで）ウエートレスが、〈ダーク・オア・ホワイト〉と聞いてくる。人種差別のことは知っていたので、私の人種を尋ねられたのだなと思った。どう答えたら良いものか。しばらく躊躇した後、意を決し〈イエロー〉と答えた。するとウエートレスが呆れ顔で、片方の手に黒パンともう片方に白パンを持って、ゆっくりと〈ダーク・オア・ホワイト〉と聞いてきた。」<sup>3</sup> 東大経済学部在学中から米国留学を夢見、後年プリンストン大学客員教授まで務めた行天氏は、留学当時、当然ながら英語能力を備えていたに違いない。にも拘わらず、初めて降り立った米国のカフェで料理を注文する状況下で、上記の聞き違いをしたことは、単なる緊張と長旅の疲労によるミスだったのであろうか。

日本人エリート層の洋行経験は、明治中期以降増え始めるが、洋行経験ほど、日本人の人種意識に強い影響力を持つものは無いのではなかろうか。というのも、人種問題を国内問題として内包してきた諸外国に対し、日本にとって人種問題は、近代以降、主として国外問題として捉えられてきた側面があるからである。

つまり日本人にとって、洋行ほど様々な外国人との直接的間接的接触の機会を与えるものは無かった。いわば人種は海の彼方に聳え立つ、目に見えて見えぬ壁として、また自国と西洋を宿命的に分ち隔てるものとして、先述した行天氏の如く、洋行に向かう自尊心の高き日本人エリートに過剰な自意識と不安を与えたのではなかろうか。

人種問題は、これまで政治外交問題として着目されがちであったが、政治外交というマクロレベルへの発展要素には、個々人の抱く人種意識の形成というミクロレベルの蓄積があることを無視することは出来ない。特に日露戦争後「一等国」意識の高揚していた明治後期の日本にとって、西洋と自国を分かち決定的な要素としての人種問題は、黄禍論や排日問題等の政治外交的課題として捉えられながらも、同時に人々の情緒的側面に極めて密接な関わりと影響力を持っていた。従って、本稿では、明治期日本の洋行エリートにおける人種的自己認識の形成について、身体文化における差別化の諸相から、殊に洋行見聞記に見られる洋装と髭の諸言説を中心に考察していきたい。<sup>4</sup>

## I 洋装という身体の「西洋化」と差別化の諸相

### 1. 中国人との外見上の「同化」

日清戦争を、文明を巡る「義戦」として説いた内村鑑三は、1884年（明治17年）に初めて渡米し、米国での主たる東洋人が中国人労働者であったがために、自分が中国人と見間違われ軽蔑されたことに嫌悪感を覚えている。<sup>5</sup> 中国人は奴隷貿易廃止以降、1848年（嘉永元年）のカリフォルニア金鉱発見や大陸横断鉄道建設などの労働力不足を補う形で大量に「輸入」されていた。1852年（嘉永5年）には中国人はカリフォルニア総人口の6分の1を数え、1880年代の在米中国人は10万5千人以上（米国総人口の0.2%）に上っている。<sup>6</sup> 1870年代から第一次世界大戦期に浮上した黄禍論の引き金になったのも、「黄色い大河」と呼ばれた大量の中国人移民の存在だった。つまり19世紀における「黄禍」の対象は中国であり、「禍」とは労働力の国際移動という実利的問題という側面が強かったといえよう。それとは対照的に、1887年（明治20年）頃の在米日本人は2千人足らずで、日本人排斥問題は深刻なものではなかった。<sup>7</sup>

日清戦争という文明を巡る「義戦」に勝利し、「文明」を獲得し始めたかに見えた日本にとって、西洋から「黄禍」とみなされた中国人と同様の扱いを受けることは耐えがたきものだったようである。1896年（明治29年）3月に豪州NSW議会で有色人種制限及取締法（The Coloured Race Restriction and Regulation Bill）が決議された際も、当時の大隈重信外相は、「有色人種移住制限ニ名ヲ籍リテ本邦人ノ移住ヲ拒絶スルノ法案」と批判した中で、この法案の最たる屈辱は、日本人を中国人と「同等」に位置づけたことで、国家の「体面」に与えられた屈辱だったという。<sup>8</sup>

然し中国大陆における日本と米国の利害対立が本格化する日露戦争後、カリフォルニアで、1906年（明治39年）の日本人学童隔離事件が生じる。これはサンフランシスコ市教育委員会が日本人学童を、米国人学童が通う公立学校から、インド人・中国人・蒙古人が通う東洋人学校に転学させる決定をしたものである。この決定は日本人を「一等国」の国民としてではなく、中国をはじめとする「東洋人」、つまりは「有色人種」として扱うということを意味していた。同年10月、サンフランシスコでの日本人学童隔離問題と排日問題について、当時の駐米大使青木周蔵は、枢密院議長山県有朋に、「学校問題ハ一時之出来事と見故すも人種問題之争ニ打負候而ハ到底大國ニ列車候甲斐もなく名誉も無之結果

可相生き」と、人種という宿命的壁への無力感を示している。<sup>9</sup>

このように日本が米国から「黄禍」と見なされるようになったのも、米国のハワイ併合（1898年／明治31年）並びに翌年のフィリピン領有、そして義和団事件（1900年／明治33年）後の中国市場介入へと続く米国のアジア・太平洋領域への進出と、山東省や満蒙の利権獲得をした日本との衝突が背景にある。<sup>10</sup>

『太陽』明治41年2月15日／14巻3号では「太平洋上の黄禍」と題し、「黄白兩人種の衝突は…近時太平洋問題の新たに世界的題目となりつゝある如き、此趨勢を語つて最も有力なるものなり。」と日米間の人種的衝突を不可避なものとして危惧しながらも、同じ「黄色人種」である中国人との同一視については、敢えて次のように否定的見解を強調し、差別化を図ろうとする。

「米合衆国の東洋人排斥は先づ支那人に初まりたり。…支那人と日本人とは最下級労働者に至るまで、其思想、品格、又生活の程度各同しからず、日本人は東洋醇化の文明に加ふるに最新西洋の文明を調和して日々進歩す、支那人の保守固陋容易に他と容たれざると多大の相違あり。」と、あくまで西洋からの人種的拒否反応の契機は中国人にあり、それは中国人の「思想、品格、又生活の程度」は勿論のこと、西洋文明とは「調和」しない中国人の性質にも起因していると強調する。

そして決して日本人は其の点において同様ではないと、西洋人の見解を交え次のように論じる。「ハーバードビー・ジョンソン博士は…《彼等（日本人）は米国に來りても全然其趣を異にせり、支那人が飽くまで其風俗を維持しつつ群居せるに異つて日本人は出来得べきだけ米国人に交はり米国の風俗に同化し、許さるゝ限り米国の学校に入り、米国の言語を学ぶ。」<sup>11</sup> と、自国の文化に固執する中国人とは如何に日本人が異なり、積極的に「米国の風俗に同化」する国民であるか説く。この文脈では、西洋への「同化」こそ、同じ「黄色人種」である中国人からの差別化の機能を果たすかに聞えよう。

しかし、西洋への「同化」が、同じ「黄色人種」である中国人との「差別化」につながるのであろうか。そもそも、排日問題の根本にある心情的嫌悪の要因が、「人種の相違に伴ふ風俗習慣言語、動作の違ひが又偏見の火に油を注ぐ。その相異も優劣の相違を伴ふ場合は一層悪結果を招く。」<sup>12</sup> と、「相違」や「相異」にあるとすれば、それを出来る限り抹消し「同化」する努力がおのずと要求される。

ましてや、「丁度我等が文化上及人種上等差別的相異のない支那人と交通しても表現し難い不自由と不快とを時々味ふ様に、増して同等ならぬ我等と接触するに當って意識無意識裡に米人が不快の感を経験するのは当然の事で、此点十年も米国に住む日本人には殆ど直覺的事実として否む可らざる事の様に見ゆる。」<sup>13</sup> と、同じ人種である日本人ですら中国人に対し「不快の感」を催すのであるから、異人種の米国人による否定的感情は殊更であると認識している。それだけに、西洋への「同化」は、「一等国」日本の国家的自尊心と体面のためにも、洋行エリートにとって重要な身体表現となった。

然し、それは同時に他の「有色人種」との「同化」をも意味し、日本人であることの自己規定を揺らがせることでもあった。たとえ中国人とは「思想、品格、又生活の程度」が



異なる性質を持っていようとも、それは容易に表現し難く、しかも目に見えない側面に過ぎない。日本人エリートにとって洋装は、可視的な「文明化」の象徴であり、其処に「一等国」日本の国家的自尊心を体現させようとした。然し洋行先では、内村鑑三のみならず、多数の洋行エリートが現地で中国人と間違われ屈辱を受けたことを書き残しているように、「一等国」日本の国家的自尊心を、西洋文化への身体的模倣で表現するという自己規定のありかた自体に、自己矛盾があったことを意味していたのである。<sup>14</sup>

## 2. 日本人労働移民への差別化：人種問題を階級問題として捉える心理的逃避

エリート層の洋行先で直面する身体の「西洋化」を巡る自己矛盾は、明治後期から米国をはじめ移住した日本人労働移民との差別化にも見受けられるようになる。

日露戦後の、企業活動の一環として開催された欧米視察団の世界一周会に対し、陸軍大臣であった寺内正毅は、洋行に向けて留意すべきこととして次のように警告する。「(洋行に際して) 唯一つ茲に注意して置いて貰ひたいのは、会員の人格問題じゃ。やゝともすると旅の恥は掻き捨てなど云ふものがあるけれども、夫れは飛んでも無い間違で、…人格や品性に関する不規律な醜態は断じて可けない。」<sup>15</sup> 寺内正毅は、洋行を前にした日本人の注意すべき点は「人格問題」であると言い切り、洋行の際「不規律な醜態」を断じて起こしてはならない理由を次のように説く。

「米国などが我が移民を○斥したがるのも、ともすると内地に於てさへ排斥されさうな下等の労働者を送るからのことで、この団体の訪問なども、成る程日本人と云ふものは○う云う立派な人間であるかと思はすると、米国民の感情を和らげて、両国親交の上に意外の効果があらうが、其の反対に中流以上の人間でさへ、丸で動物園の猿の様だと思はれるやうだと大変だ。之は必ずしも米国ばかりじゃ無い、欧米至る処さうである。我輩は硬く此の擧の成功を祈る一人じゃ。」<sup>16</sup> 既に西洋には、日本から多くの「人格」を有さぬ「動物園の猿」のような「下等な労働者」が移住しているが為に排斥問題も起こり、欧米の、日本人に対する否定的感情を生み出すことになるという。そこで世界一周会メンバーであるエリート達に向け、其の「汚名」を取り払うべく、「人格」に留意して洋行に望むべきだと説くのである。

ここには、先述した中国人に対する差別化と同様の論理が働いている。西洋から人種の拒否反応を受ける要因には、人種とは一見無関係のような「人格問題」にあるとし、日本国内でも問題の「下等の労働者」が海外に行くから「排斥」が起こるのであって、「人格」を持つ日本人が米国へ行けば「米国民の感情を和らげ」る事が出来るとする。

然し他方では、「中流以上の人間」が行っても「丸で動物園の猿」と思われかねない事態も感じ取っている。寺内正毅の視点には、迫り来る人種問題という宿命的壁の予感と、まだその現実を受け入れたくないという、当時の平均的意見が素朴に込められており、日本人排斥を「階級問題」として考えるか、日本人全体の関わる「人種問題」として考えるかの岐路に立っている様子が窺える。

要するに、階級問題としてカリフォニアの排斥問題を考えれば、それは日本人全体の問

題ではなくなる。それは一部の日本人の「人格」や品性にまつわる問題として、エリート中のエリートであった寺内などは、自身と無関係の問題と解釈できた。然し先述したように、「人格」を巡る努力とは、一体何なのか。「人格」は如何にして可視化出来るのか。排日という人種問題を、「人格問題」に要因づける寺内には、「人種」という西洋と自身を分かち宿命的壁からの懸命な心理的逃避があったのではなかろうか。

寺内と同様に、排日問題の要因を「風紀」として捉える者もいた。1909年（明治42年）5月1日『太陽』に掲載された安孫子久太郎「排日問題の真相及其の将来」では、カリフォルニア移民の排斥問題は「風紀」も起因すると次のように指摘する。

「事業より言へば、農業の経営は在来日本人の勢力であるが、数より言へば、労働者は太平洋沿岸の中心である。労働者の風俗品性が在来日本人一般の面目に関するもの尋常でないのは自然の結果である。故に吾人は排日問題解決の第二策として、在来日本人は其の品性と風俗とに十二分の注意を置くに在りと思惟する」。<sup>17</sup>

排日問題の根本原因が人種にあることは周知であろうとも、敢えてその解決策として、在米日本人の「品性と風俗」への「十二分の注意」を主張する。然し先述したように、「品性」は如何にして可視化出来るのか。当然のことながら、風紀・人格・品性は、いずれも不可視に近いものである。殊に洋行という短期的滞在での無数の西洋人との遭遇を強いられる社会空間において、不可視なものが直接的影響力を持たないことは彼らも承知のはずだっただろう。排日問題に対するこのような感情的主張には、西洋からの承認を巡って、同じ日本人でありながら、移民労働者とは異なるというエリートのせめてもの差別化を求める気持ちに加え、人種という宿命的壁に直面しつつある現実からの心情的逃避が見られるのではなかろうか。

確かに、同胞であるとはいえエリート層にとっては、社会的下層との風俗上の違和感もあったのかもしれない。近代日本を代表する外交評論家である清沢冽が青年時代に渡米して半年程度の1907年（明治40年）7月末頃にも、故郷に送った手紙に、米国では「大和民族」は「ジャップ！スケベイ」と呼称され、「彼等はあらゆる軽蔑の声を以て迎へて呉れます。」と書き記している。<sup>18</sup> また、清沢と同時期の1906年（明治39年）から2年間米国に滞在し、その後1年有半の欧州滞在を経て帰国した中村吉蔵は、自身の洋行見聞を『読売』『毎電』『太陽』等に掲載し、1910年（明治43年）に刊行した『欧米印象記』で、日露戦後のカリフォルニアの様子を次のように記している。

「日本人が通ると、労働者等は、折々《ジャップ、スケベイ》といふやうな嘲弄の語を吐いてゐる、桑港辺では、今でも石を投げかけたり何かするさうだが、併し十年以前は、日本人は黒人と同様位にしか見られなかつたもので、今日は、生意気な輩なんか、黄禍などと云ふものもあるさうだ、柔術は余つ程恐れられてゐる様子で、日露戦争と共に、日本人の地位の上つたのは争はれない」<sup>19</sup> と、「ジャップ、スケベイ」と罵られながらも、「黒人と同様位にしか見られなかつた」「十年以前」に比べれば、「黄禍」と恐れられているだけ、日本人の地位が上がったと感じたようだが、日露戦争後の洋行先では、日本で何処の社会階層に属していようとも、同じ「ジャップ・スケベイ」と「歓迎」されたことに、エ

リートとしての嫌悪感が隠せなかったのかもしれない。

日本人に対する人種の問題が浮上し始めた1903年(明治36年)秋に渡米した永井荷風は、『あめりか物語』の諸処に、いつ何処へ行っても“ジャップ、スケベイ”と囃し立てられたことや、日本人労働移民の残酷な暮らしぶりとその悲哀を描いているように、当時のエリート層にとっては、異国の地での日本人という共同体意識にすら、翳りを抱いていた側面は否めない。<sup>20</sup>

要するに、エリート達が自らの象徴とみなしていた洋装という外見上の「文明化」は、洋行先において機能することは無く、むしろ、それは中国人との「同化」を意味し、当時浸透しつつあった人種の観点からすれば、中国人も労働移民もエリートも同じ「有色人種」であり「ジャップ」に過ぎなかったのである。洋装による自己規定の自己矛盾という現実に直面したのが洋行経験だった。では、洋装という身体の「西洋化」に次いで、エリートとしての差別化と自己顕示的機能を果たした身体部位である髭においてはどのような展開を見せたのであろうか。

## II 身体的模倣としての髭とその限界

髭は、身体の中でも、最も容易に加工出来、差別化を図ることの出来る身体部位である。明治初期から日本人エリートにとって、「髭」は立派なステイタス・シンボルとなったが、これは欧米社会から持ち込まれた風俗であると同時に、江戸の役人が髭を蓄えなかった風習への対抗でもあった。<sup>21</sup> そして江戸時代には、髭を蓄えることは、降職した武士などの一種の服喪の表現であり、髭を蓄えた人間は何処か「卑しい人間」というイメージがあったものの、19世紀以降西欧にて、かつて廃れた髭が再度流行したことから、日本でも其の模倣が始まったと水谷は指摘している。<sup>22</sup> それ以来、髭は明治期エリート層にとって身体の「西洋化」の典型であり象徴となった。

髭に対し、このような認識が背景にあれば、彼らが西洋世界での政治家や財界人に立派な髭を期待したのは当然であった。ところが、洋行先で見た「髭文化」の現実、もはや過去のものとなりつつあったのである。朝日新聞記者会編『欧米遊覧記』(1910年/明治43年)には、巡遊中にみた欧米の将校達の肖像画について「米国の志士は、政治家も軍人も総て全く無髭なり、当時の風習なりしとぞ知らるれ、(昨今もまた無髭が流行るとやら、鼻の下も顎も頬も総て剃れるが多し、)」<sup>23</sup> と記されている。日本人には「髭」が欧米の規範となっていたというのに、“本場”の西洋では既に廃れ始めてきていたのである。19世紀の西洋において髭は流行していたものの、20世紀においては衰退をみせていた。本項では、エリート自らが文明の象徴であるとした「髭」の模倣が、欧米では既に時代遅れになりつつあるだけでなく、その象徴が逆に「下層階級」の象徴になっていたことに気づかされていくプロセスを、洋行見聞記から考察したい。

### 1. 欧米の社会的上層における髭の衰退

童話作家で知られる巖谷小波は、1900年(明治33年)から2年間、独逸伯林府東洋語

学校の日本語教授を務めていたが、1902年（明治35年）に辞職し、欧米漫遊中の見聞として『洋行土産』を刊行、1909年（明治42年）に渋沢栄一も参加した実業団の三ヶ月間の渡米に参加し、帰国後『新洋行土産』を刊行している。<sup>24</sup>

1909年（明治42年）の渡米の際の見聞記である『新洋行土産』には、実業団の髭の有無も掲載されており、「髭の有無を見ると、総員四十四人の内、有る者が三十四人、無いものが十人」<sup>25</sup>と、髭が日本人エリート達に普及していたことが伺えるが、欧州に先駆け、髭の流行は終焉しつつあった米国の様子を、小波は次のように記す。「ワシントンの国務省では、国務卿ノックス氏に会見し、次いで天長節の夜会で、同氏の演説をも聞いた。氏は大統領タフト閣下の友人で、弁護士中の財産家でもあり、又雄弁家として知られた人である。丈の短い、太った、色の白い、髭の無い、一寸見るとむしろ日本人に似た、温厚らしい紳士である。」<sup>26</sup> 財産家のロックフェラーや、財産家で政治家のノックスが髭を蓄えなかったのは、時代の最先端を行く20世紀の新風俗であった。洋行先での髭の有無といった細部に渡る身体観察は、既に欧州滞在経験のある小波だからこそその視点かもしれないが、周辺国から「本場」へ行くと、このようなタイム・ラグはしばしば生じる。かつては、「風采」を気にしての蓄髭だったが、既に「汚い髭」を剃り落とすことが「風采を構う」ことになっていた。

戸川秋骨は1908年（明治41年）刊行の『欧米記遊二萬三千哩』にて、船内で「此の桑港君と余等と同行の村田君とは、窓の外で切りに談笑をつづけて居る。少し声が高じ過ぎると思つて居ると、果せる哉、隣室に居た、馬鹿に背の高い大づらで無髭の一紳士が首を出して〈少し静かにしてくれんか〉と西洋人の言ひ方としては甚だ礼を欠いたきめ付け方をやつた。」<sup>27</sup>と、戸川にとっては身長も体格も巨大な、「無髭の一紳士」の存在を知る。後述するように、身長も体格も小柄な戸川にとり、唯一西洋人に負けぬという自信に満ちた身体部位が髭だった。自身にとってみれば、西洋文化への模倣であったはずの髭が、西洋人には見受けられなかったのである。

黒坂勝美は、同時期の米国・エール大付近での様子を「学生なんかその校内では特別としても、労働者まで大抵山高帽といふ風で、烏打帽など一寸見当らぬのに、フロックコートなどは日曜に寺参りをする人々の外は余り見受けなかった、また米国人は多く奇麗に髭髻を剃って居る、蓄髻の紳士はまづ六十以上の老人位といつて差支ないのであらう、これは前大統領ルーズベルト氏がその髻を剃り落してからの流行で、一方に於てルーズベルト氏の勢力が如何に大なるかを示すと共に、彼の地に於ける流行なるものがこれら偉人より出づるを思へば、国民の向上心がまた如何に大なるかを想像するに足るであらう。」<sup>28</sup>と身体風俗の様子を記している。20世紀初頭の米国では、ルーズベルトの無髭を発端として、有髭文化は衰退し、髭を蓄えるのは「まづ六十以上の老人位」であった。

そのせいか、洋行エリートの一人が、髭に関し西洋人に至る処で笑われる対象になる。20世紀初頭、1907年（明治40年）頃から1909年（明治42年）頃のニューヨークでの光景が次のように記されている。「紐育見物の男女が、乗合自動車に乗って居る。我等も其れに乗る。先づ大熊君の髻が眼につき、男も笑ひ、女も笑ふ。何んで、米国人は、髻が可

笑しいのか、僕は薩張り解らない。初め僕は西洋人と云へば、髭のあるものと思ふて居たのに、米国の男は、スッキリと髭を剃って、奇麗にして居る。顎ひげも皆無とは云へないが、有っても、短く切つて居る。是れと云ふのも米国は、平民主義の国であるからであらう。又文明国の人間は汚い髭を、すり落して、男でも風采を構ふのであらう。僕は大熊君に、数々髭を剃り給へと伝ふたが、先生曰く、此の髭で欧米を風靡するのだと。」<sup>29</sup>

ここには、髭文化に対する田辺英次郎の素朴なカルチャーショックが表されている。戸川と同様、田辺にとっても、日本で思い描いた西洋人とは髭を蓄えた人々であった。それゆえに日本人エリート達は、身体の「西洋化」として、髭を蓄え、誇示していた。にも拘わらず、当の米国男子は髭を綺麗に剃っていたのである。同行者の「大熊君」が誇らしげに日本で蓄えてきた髭が、承認を求めた米国人に笑われる対象になってしまった。欧米人に認められんとした模倣行為が、既に笑われる対象になっている事に気づいた田辺は、別の日にもニューヨークの独立記念館に向かう際、「電車に乗り込むと、大熊君の髭で、クスクス笑ふ婦女の多いのに、極まりが悪かった」<sup>30</sup> と、「大熊君」の髭、及びそれに対する米国人の反応への不快感を三度も著書で記すほどであった。

## 2. 下層階級の象徴としての髭へ

米国における髭事情で着目すべきは、米国エリート層で髭を蓄えることが衰退しただけではなく、髭が下層階級の象徴へと転換していることを日本人エリート達が発見したことであった。其の転換を最も端的に記しているのが先述した戸川秋骨である。

ニューヨーク・ブロードウェイで床屋に入る戸川は、床屋に入るなり「大層結構なお髭ですネ」とお世辞を云われ、洋行先で忘れかけていた、失い欠けていた自負心を次のように取り戻す。「思へば横浜の乗船以来余の一身に外国人に対して勝つて居るものは一つもない。背は低い、力はない、着物は汚い、大体かれ等と肩をならべる事は出来ぬが、ひとり余の髭に至ってはかれ等のそれに比して甚だしい遜色はない。」<sup>31</sup>

洋行先で認識させられた自らの背の低さ、身体的劣位、服装の貧困、どれをとっても圧倒されがちであったものの、床屋に指摘されたように髭だけは、日々、甚大な労力をかけて整えてきたことを次のように記す。

「こればかりはやや意を強ふするに足るが、さて乗船以来余に尤も多くの煩を與へるものは又此髭で、頬髭を剃るがために日夜少なからぬ苦悶を重ね、毎日剃刀と組打を仕て居る次第である。其苦痛は到底傍人の想像も及ばぬほどであらう。さりとてこれを其ままたに放任して置く勇氣は恥ずかしなならない。何となれば如何に下等の人間でも髭丈はきれいに剃つて居るのが此地の風である。其上現時の流行は全く上髭をまで剃り落すか、若くはそれを極めて短く刈り込むのである。」<sup>32</sup>

日々の絶え間なき髭の手入れにより、自らの髭を自負していた戸川も、洋行先の米国では既に「下等の人間」でも髭を剃っている現実と直面し、戸惑いの感情を次のように記す。「折角やや誇るに足る髭を剃り落し若くは刈り込むのは甚だ残念でたまらぬではないか、それ故未練がましくも上髭は其ままにのばしては置たが、余の如き長髭を蓄へて居るのは

労働者位の外にはないのである。〈床屋の結構なお髭〉は畢竟お世辞に過ぎぬ。」<sup>33</sup>

戸川が精魂込めて手入れをして蓄えた「文明」の象徴としての髭は、文明国としての最先端である米国では、既に「労働者」の象徴へ変容してしまったことを、洋行先で気づかされるのである。

確かにこの頃から、髭自体が不潔であり、無礼の対象となったようで、1899年(明治32年)の鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』では、ロンドン、パリにいるスペイン人について、「西班牙人と云へば倫敦巴里に於ては一概に軽蔑し、殊に婦人は彼等を以て衣服整頓せず、頭髮梳らず髭〇また蓬々として不潔なりとて大に之を嫌忌するもの如し、」<sup>34</sup> と描かれ、西洋の大都市においてスペイン人が軽蔑されている一因は、整えていない髭にも代表される不潔な身体にあった。

明治後期の米国・布哇移住案内のマナー指南書にも、同様の説明が掲載されている。「西洋では髭をはやして居るは他人に対して無礼としてあるゆへ平生毎日又は一日隔に髭を剃らねばならぬ、立てた髭なら綺麗に掃除が大切です、是は大に平生の心得なれども船中でも十分注意せねばならぬ、剃刀と砥石の用意があれば自分で剃ることが出来甚だ経済です」<sup>35</sup> 髭は西洋に向かうならば剃るべき、なくすべき身体表現であり、「凡て東洋の豪傑風又は書生風に身辺を飾らず、所謂垢面蓬髪は西洋と相容れざる事と知らねばならぬ」<sup>36</sup> と、もはや髭というものが欧米文化というよりも、「東洋の豪傑風又は書生の風」と解釈されつつあったのである。<sup>37</sup>

そんな時代遅れな髭を自負していた戸川は、最先端の文化都市であるニューヨークでは「肩身の狭さ」を感じ始めていたが、東海岸から欧州へ向かう船の中で、ドイツ語と英語の飛び交う船内に「内心は素より表面まで閉口して仕まった」と書きながらも、「一寸辞つて置くが船員は悉く独逸人で何れも紅顔気鋭の見るからに勢ひの良さうな男ばかり、髭を短くかり髭は例外のカイゼル髭の両端を高く捻り上げたものである。此に至って余の頭余の髭もやや同類を得たやうで、少しは肩身の広くなったやうな感があった。」<sup>38</sup> と、ドイツ人船員が、流行に遅れながらも西洋世界の一員という文化的記号を担っていた自身の髭を「正当化」してくれたことから得られた安堵感を隠せない。<sup>39</sup>

日本出国前までは、「聞く処に依ると、日本を出立する場合には多く故国に対する眷戀の情と別離の感とに充たされ、有髭男子でありながら、屢々落涙に及ぶものさへあるといふことである。」<sup>40</sup> とあるように、日本国内においては健在だった「有髭男子」というエリートとしての象徴が、洋行を経験することにより崩壊していくのであった。

身体的模倣としての髭は、童顔とみなされる日本人の顔立ちを払拭する意味もあったのかもしれない。然し、もし西洋における髭が、既に「上流」の象徴を失い、「下層」「労働」のシンボルとなりつつあったことを認識していたら、エリート達は髭を勇んで生やし洋行に挑んだのであろうか。洋行は、彼らに身体文化における模倣の限界の連続的体験となったのである。

## おわりに：身体的模倣の限界と人種的体験としての洋行経験

本稿では、明治期日本エリート層の人種的自己認識の形成について、洋行経験と身体文化における差別化の諸相から、特に洋装による中国人との「同化」への抵抗、日本人労働移民との差別化、そして髭という身体的模倣と流行の衰退を中心に考察した。

はじめに論じたように、日本国内における身体の「西洋化」は、人種問題を国内問題として深刻に抱えていた欧米に比べ、日本のそれは国外問題としての側面が色濃かっただけ、「文明化」された象徴という文化的機能だけを担うことが出来た。しかし様々な人種が混在する欧米においては、身体の「西洋化」は、同じく洋装した中国人に対する外見上の「同化」をも意味した。同時期の欧米で急速に浸透しつつあった人種的観点からすれば、洋装によって日本人も中国人も外見上の相異は解消されてしまう。それはおのずと、日本国内では気付かなかつた、また気付く必要も無かつた、「西洋化」による自己規定に潜む人種的な自己矛盾を露呈させることとなった。

その自己矛盾を敢えて正当化させるかの如く、洋行エリートは人種的同一性を持つ中国人や同国人労働移民の「人格問題」という不可視なものの差別化に着目する。しかし、身体の「西洋化」に潜む自己矛盾を、出身階層や「人格問題」という目に見えぬ差別化で解消し抹消しようと試みながらも、洋行先に立ちほだかつた、人種という宿命的壁を前に、「一等国」日本としての自己規定となりうる論理を見出すことは出来なかつた。このような人種という迫りくる宿命的壁を前にした心情的逃避こそ、「脱亜」から「入亜」への不安定な自己規定の一面だったのでなかろうか。

この時期の自己規定の不安定さは「中間形態」（米原謙）と指摘されているが、西洋への身体的模倣における自己規定と、そこに潜む「一等国」日本としての自己矛盾に直面していく過程は、当時の「中間形態」にあった近代日本の人種的自己認識の特徴を示しているよう。<sup>41</sup> また、その後の1919年パリ講和会議における人種不平等撤廃案や排日問題をはじめ、日本人の関与する人種問題が浮上する大正期に、徳富蘇峰や大隈重信をはじめ当時の言論人が、世界における日本の位置づけを「東西文明融合の地」と提唱していったことも、「イエロー」でありながら「文明」を獲得していく日本にとっての、人種という宿命に対するせめてもの自己規定を巡る必然的帰結だったのでなかろうか。<sup>42</sup>

明治期日本エリート層の自己証明であり自己顕示でもあった洋装は、日本国内では差別化となったが、西洋では中国人との「同化」となった。髭さえも、西洋への模倣という機能を果せぬまま、海の向こうにあったのは、その儂さであり虚しさでもあった。

かくして、彼らの華々しき洋行は、「一等国」日本としての自己規定のありかと思なした、西洋文化への身体的模倣の限界と自己矛盾の発見の旅となった。そして同時にそれは、海の彼方に仰ぎ見た西洋に立ちほだかつた、人種という宿命への身体的遭遇の旅でもあったのである。



- 1 拙論「華麗なる〈有色人種〉という現実—明治期日本エリートの洋装にみる洋行経験の光と影—」伊藤守編『文化の実践、文化の研究—増殖するカルチュラル・スタディーズ—』せりか書房、2004年
- 2 拙論「〈黄色人種〉という運命の超克—近代日本エリート層の“肌色”をめぐる人種的ジレンマの系譜—」栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』青弓社、2004年
- 3 行天豊雄「私の履歴書—行天豊雄⑦—」『日本経済新聞』2006年10月7日、冒頭の括弧は筆者が挿入した。
- 4 本稿では、本テーマに関連し、取り上げるべきケースとして、洋行の殆どで和装し、髭を蓄えていた岡倉天心などが挙げられるが、それに関しては別途発表する次第である。
- 5 三輪公忠『日米関係の意識と構造』南窓社、1974年、101頁／内村鑑三著・鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒になりし乎』岩波文庫、1962年（18刷）、117—119頁
- 6 ハイイツ・ゴルヴィツァー『黄禍論とは何か』草思社、瀬野文教訳、1999年、24—25頁、胡垣坤ほか編、村田勇二郎・貴堂嘉之訳『カミング・マン』平凡社、1997年、9頁
- 7 若槻泰雄『排日の歴史—アメリカにおける日本人移民—』中央公論社、1972年、24頁
- 8 竹田いさみ「白豪主義の成立と日本の対応—近代オーストラリアの対日基本政策—」『国際政治』68号、1981年、28頁
- 9 高橋勝浩「大正2年（1913年）カリフォルニア州排日土地法と日本の〈対米啓発運動〉」『国学院法研論叢』國學院大學大学院法学研究会、第17号、1990年、90頁
- 10 米原謙『徳富蘇峰—日本ナショナリズムの軌跡—』中央公論新社、2003年、203頁
- 11 以上、「太平洋上の黄禍」『太陽』明治41年2月15日／14巻3号
- 12 佐藤剣之助「加州排日問題の真相研究及対策」『太陽』大正9年11月1日／26巻13号
- 13 同上、同頁
- 14 前掲「華麗なる〈有色人種〉という現実—明治期日本人エリートの洋装にみる洋行経験の光と影—」103頁
- 15 石川周行編『世界一周画報』東京朝日新聞会社（1908年初版）、『明治欧米見聞録集成』第30巻、ゆまに書房、1989年所収、20頁（中略は筆者）
- 16 同上、20頁
- 17 安孫子久太郎「排日問題の真相及其の将来」『太陽』明治42年5月1日／15巻6号
- 18 北岡伸一『清沢淵—日米関係への洞察—』中央公論社、1987年、19頁
- 19 中村吉蔵『欧米印象記』春秋社書店、明治43年初版、『明治欧米見聞録集成』ゆまに書房、第33巻、1989年、28頁
- 20 永井荷風『あめりか物語』講談社文芸文庫、2000年、107、111、118、138頁など。
- 21 水谷三公『日本の近代③—官僚の風貌—』中央公論社、1999年、8—10頁
- 22 水谷前掲、10—13頁
- 23 朝日新聞記者会編『欧米遊覧記』朝日新聞合資会社、明治43年、145—146頁
- 24 古林亀治郎編『日本実業家辞典』立体社、明治44年初版、1990年（復刻版）、イ19—20頁
- 25 巖谷小波『新洋行土産』博文館出版、明治43年、『明治欧米見聞録集成』第31—32巻、1989年、上・

- 8 頁、この身長リストでは、本書 288 - 289 頁に「渡米実業団員各種統計」年齢、身長、洋行回数、子供数、体量の統計表がある。
- 26 巖谷前掲、下・85 頁
- 27 戸川秋骨『欧米記遊二萬三千哩』服部書店、明治 41 年、5 頁（『明治欧米見聞録集成』第 29 巻、ゆまに書房、1989 年、25 頁）
- 28 黒坂勝美『西遊二年欧米文明記』文会堂書店、(上) 明治 44 年、14 - 15 頁、(『明治欧米見聞録集成』第 34 - 35 巻、ゆまに書房、1989 年所収)
- 29 田辺英次郎『世界一周記』梁江堂書店、明治 43 年、75 頁。
- 30 同上、93 頁
- 31 戸川前掲、80 - 81 頁、
- 32 戸川前掲、80 - 81 頁、
- 33 戸川前掲、80 - 81 頁
- 34 鎌田栄吉『欧米漫遊雑記』博文館、明治 32 年、363 頁、(『明治欧米見聞録集成』第 20 巻、ゆまに書房、1989 年、391 頁)、○は解読不可部分。
- 35 木村芳五郎・井上胤文『最新正確 布哇渡航案内』博文館、明治 37 年 2 月、7 頁、(『近代欧米渡航案内記集成』第 3 巻、ゆまに書房、2000 年所収)
- 36 同上、26 頁
- 37 同様の指摘は、明治 37 年刊行の渡米案内にも、米国上陸への第一の注意事項として「髭の生ひたる人は之を綺麗に剃るべく爪の長くなりて垢の溜まった人は速かに切べく大体天晴の紳士淑女となるべし」と記されている。(島貫兵太夫『最近渡米策』日本力行会、明治 37 年 9 月、97 頁、(『近代欧米渡航案内記集成』第 3 巻、ゆまに書房、2000 年所収))
- 38 戸川前掲、127 - 128 頁
- 39 カイゼル髭を生やした高峯讓吉・大隈重信らの写真あり(林富平『欧米視察案内』米国事業視察団、大正 9 年 (『近代欧米渡航案内記集成』第 7 巻、ゆまに書房、2000 年所収))
- 40 戸川前掲、21 頁
- 41 米原前掲、159 頁
- 42 前掲「〈黄色人種〉という運命の超克—近代日本エリート層の“肌色”をめぐる人種的ジレンマの系譜—」118 - 123 頁

## **ABSTRACT**

### **Imitate to Differentiate: “Westernization” of the Body and Racial Dilemma among Male Elites in Modern Japan**

In a Japan where Western fashion was still quite rare, to the Meiji elite, facial hair and Western dress was a sign of civilization, and within the milieu of Western assimilation it fulfilled the simultaneous function of exhibitionism and differentiation. Outside of Japan, however, rather than assimilating the West, these Meiji elites had to face the reality that they were viewed merely as “colored people” who wore Western dress. After the Russo-Japanese War, Japan’s awareness of itself as a world power was accompanied by the realization that it still remained a “yellow race.” I would like to examine how the Meiji elite responded to this racial dilemma by considering the problem from the perspective of the contemporaneous bodily culture, specifically focusing on Western dress and facial hair.